



## 巻頭言

# 子どもの力

吉村 真理子

### 弱さの力

筆者のいた松山東雲短大では授業に卒業生に参加してもらうことがよくありました。特に「乳児保育」の授業では母親になった卒業生に母子で登場してもらうと、乳児の発達特徴を学ぶだけではわからない生きた乳児の実像による感動が教室中に広がっていくのがわかります。筆者はもう退職しているのですが後任の先生が次のような話をしてくれました。

先週の授業にMさん親子にきてもらった後の学生の感想文にこんなのがあったのですよ。「教室にお母さんに抱かれてSちゃんが入ってきた途端、思わず笑顔になっている自



分を発見して驚いた。このところ成績のことや友人との悩みを抱えて落ち込んでいたのできつと暗い表情をしていたと思うのに、心の底からわき上がってくる自然な笑顔はどうしてなのか。その快さにひたりながらそつと周りを観察してみた。するとみんなの顔が笑っている。おもしろいから、滑稽だから笑うのと違って満ち足りた幸せそうな笑顔がそこにあった。ただそこにいるだけなのにみんなをこんな気持ちにさせてくれるあかちゃん不思議な力に感動した。もう一つは、お母さんが子育ての苦労を『大変だ』と話しながらも子どもを見る目やしぐさの優しさが心に残った。母親や他人の私たちまでこんな気持ちにさせてくれる、子どもが生まれながらに備えている力とは何なのだろうか、なかなかいい視点だと思いませんか、と。

その話を聞きながら筆者が数年前骨折をした後、駅や乗り物の中で見知らぬ人々から親切にもらったことを思い出しました。自分が思うように動けない状態にいると周りの人が手を貸そうとしてくれます。その気持ちを引き出しているのは私の能力ではなく無力さのゆえです。そこには自分たちにとっては何の役にたたなくても弱者の存在を認め大切にする人間性を感じて頼もしく思いました。同じ弱者といっても乳児の場合もつと能動的で、生きていくためのありとあらゆる世話を要求し、ところかまわず泣きわめき暴君ぶりを発揮しています。子どもは未来という希望を担っているゆえに生きる権利要求の見



事さに大人は無条件に感動させられるのでしょうか。保育の基本は大人の心に呼びかける子どもの力ではないのでしょうか。大人はそれに応えずにはいられません。

### 未来を夢見る力

絵本『いつかはきつと』（シャールロット・ゾロトフ作、ほるぶ出版）には、ある女の子が「早くこんなふうになったらいいな、いつかはきつとこうなるにちがいない」と身近な夢を描いて楽しむ様子がほえましく描かれています。例えば、バレエのおけいこに行く先生がみんなに「エレンをごらん、あの上なこと」とほめてくださるの。うんとお金持ちになったら知ってる人みんなにプレゼントをして、お礼を言われても「どういたしまして、それぼっち」とつつましく答えるの。ひとりでさっさと寝に行つて、パパとママに「もう寝るの？ 今日はやけにおりこうさんね」と言わせてあげる、などなど。しかし、現実には、エレンはいつもバレエのレッスンで先生に注意されてばかりいるのでしょうか、友だちにプレゼントを買うだけのおこづかいを持っていません。おそらく毎晩「いつまでテレビを見るの、早く寝なさい」と言われ続けているに違いありません。でもこれはエレンのささやかな到達目標とも言えるでしょう。

子どもたちは途方もない大きな夢とともにもう少ししたらできるかもしれないという実現可能な夢を抱いて生きています。それが成長願望であり子どもの人生を楽しくする原動



力になっています。

佐伯胖氏によると、人間の生き方の目標として「子どもらしくなる」ことを「円熟」と、呼び、保育（幼児教育）というのは、そのような「円熟」を文化として大切にし、私たちの「生き方」として、すべての人々に「子どもらしさ」のすばらしさ、大切さを訴える文化的実践である、と述べておられます。

ここで取り上げた「子どもらしさ」とは、能力のゆえではなく無力ながら存在そのものがもっている未来への希望を抱いて生きる姿勢を指していると思われまます。自分のまわりを新鮮な目で眺め、喜びを感じ希望を持つ心は大人になったからといって捨てる必要はありません。C・S・ルイスは児童文学を書く極意をたずねられたときに「私は子どものときはオレンジジュースがとて好きだった。現在はワインが好きですが今でもオレンジジュースは喜んで飲みますよ」と語ったと言われます。つまり子ども時代の喜びを大人になっても変わらず持ち続けていることが大切ということでしょう。

現代社会の数々の問題を抱えて忙しい保育者が目指す円熟とは、子どもの可能性だけでなく自分自身の限らない可能性を信じ夢見ること、つまり、子ども時代の喜びをそのまま心によみがえらせることではないのでしょうか。そのためには毎日出会う子どもたちの中に「子どもらしさ」を見つけて共感することで、私たちも少しずつ「子どもらしくなる」文化的実践に近づけるのではないのでしょうか。

（元松山東雲短期大学）